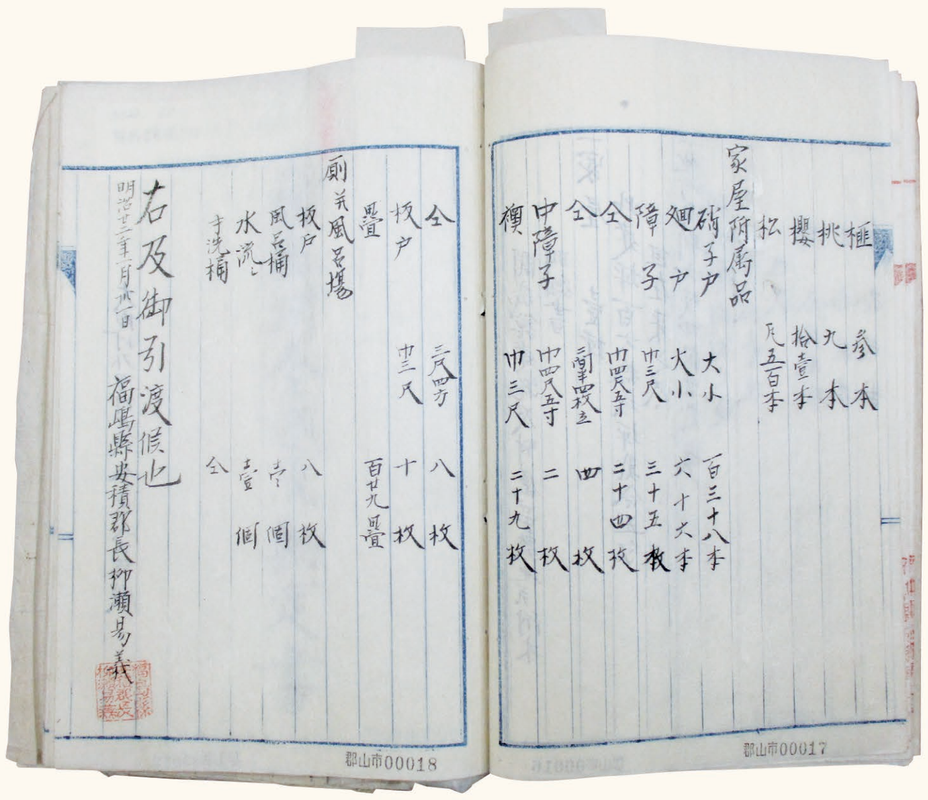
開成館活用の歴史 ― 住居

住居としての開成館

区会所として建てられた当初から、開成館の１階は居住スペースとして活用されてきた。２階は事務スペースとしての活用が主であったようである。郡役所や農学校など入居者が変わる中でも、スペースの活用方法は似ていたといえる。

現在の開成館には風呂・トイレは設置されていないが、明治16年（1883）8月の開成館について描かれた図（『明治二十二年開成館引継書類』郡山市教育委員会蔵）には、開成館1階西側に「浴場及便所」が描き入れられており、また明治22年（1889）の引継書類にも「厠幷風呂場」の記載がある。このことから、現在は存在しない風呂・トイレが設置されていたことがわかる。



開成館建物及び付属品敷地幷附木明細書

『明治二十二年　開成館引継書類』　郡山市教育委員会蔵
家屋付属品として「硝子戸」がある。開成館が建築された際に、東京から取り寄せたガラスを使用した。
現在も一部当時のガラスが残る。
現在は存在しない「厠」と「風呂場」があり、風呂桶などが付属品として記載されている。

居住者	畳				合計
中島 昌徳	8畳敷　2間	6畳敷　1間			22畳
近藤 直道	8畳敷　1間	6畳敷　2間			20畳
相沢 正道	8畳敷　1間	6畳敷　1間	4畳敷　1間		18畳
倉兼 昌利	8畳敷　2間		4畳敷　1間		20畳
斎藤 大三郎	8畳敷　1間		4畳敷　1間		12畳
北の隅明家	8畳敷　3間		4畳敷　3間		36畳
合計	8畳敷　10間	6畳間　4間	4畳間　6間		128畳
	80畳	24畳	24畳		

開成館内吏員居住調

「開成館内吏員居住調」（『名勝天然記念物開成山（櫻）に関する調査』）を基に作成（一部修正）
開成館が明治天皇巡幸の際に行在所として使用されるにあたり、
調査したものと思われる。「合計135畳60人入る」とある。合計が合わないが、
行在所として使用する際に1階に畳135畳を入れるとある。
現在は4畳間はないので、6畳間の内の4畳を使用していたものか。
明治9年当時、開成館に居住者がいたのがわかる。

久米正雄と開成館

開成館に実際に住んでいた人物として、作家の久米正雄がいる。正雄は、開拓科出張所長を務めた立岩一郎の孫にあたる。正雄の幼少期に父が亡くなり、母の実家・立岩家がある開成山へ一家で越してきた。久米家は、立岩家の近くにある開成館の一角を借り、居住した。正雄が作家となってから、当時のことを書き起こしている。「吾が少年時代」（『久米正雄全集第13巻』）によれば、久米家が住んだのは開成館内の「東北の角を鉤なりに、広い台所と広い物置附」の場所であり、「六畳八畳取交ぜ」て「五ツ間」あったという。

久米正雄

立岩家文書　郡山市歴史資料館蔵
学生時代に撮影したもの。東京丸木利陽製。
久米正雄は、大正2年（1913）に東京帝国大学文学部（現在の東京大学）へ進学している。

正雄は、県立安積中学校（現在の県立安積高校）在学中に俳句を作り始めた。正雄に影響を与えた人々に、安積中学校教師の西村雪人や田辺三貝（さんかい）がいた。田辺は、久米家同様、開成館に住むひとりでもあった。

「吾が少年時代」には、日清戦争で出征する「柳澤大尉と云う予備将校」もまた、開成館の一隅に住んでいたとある。

開成館が戦後市営住宅として活用される以前から、一部の人向けではあるが、住宅として活用されたことがわかる。

幼少期の久米正雄

立岩家文書　郡山市歴史資料館蔵
前列右側が久米正雄